

「未来の担い手育成プログラム研究指定校」事業報告書（2年次）

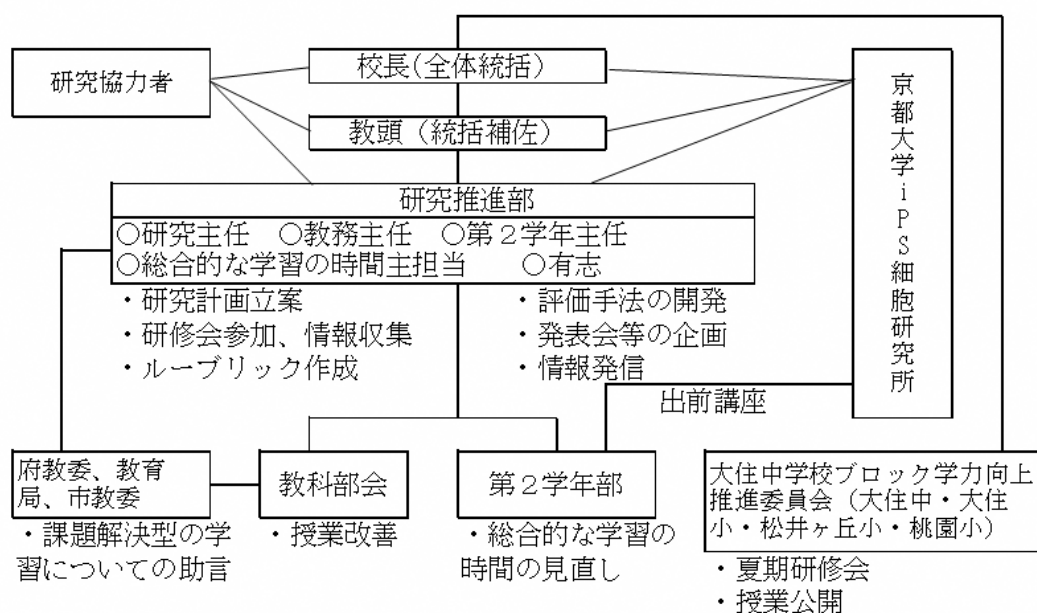
1 学校名等

学 校 名	京田辺市立 大住中学校				校長名	森本 克美
研 究 主 題	「学びが変わる」「子どもが変わる」「学校が変わる」課題解決型の学習の充実					
研究の目的	<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決型の学習を通して、生徒の学びの深化・発展を図る。【学びが変わる】 ・CiRA（京都大学 iPS 細胞研究所）との連携により、質の高い知識・論理的思考力・協調性・知的好奇心等を一体的に育成する。【子どもが変わる】 ・これまでの総合的な学習の時間を課題解決型の学習を軸として展開し、その視点を教科学習の指導改善や道徳科の指導力向上に波及させ、教職員が新たな学びを創造することにつなげる。【学校が変わる】 					
学 年	1年	2年	3年	特別支援	合 計	教職員数 ※校長・教頭を含む
学 級 数	6	6	7	2	21	47
生 徒 数	223	245	246	11	725	

2 研究校の概要

（生徒の実態、学力状況(分析)、研究体制等）

全国学力・学習状況調査の結果等から、「各教科の点数としての学力」は相対的に高い状況にあるといえる。ただし、点数として表出しにくい「人と人が対話し納得解や解決策を生み出していく」ための「コミュニケーション力」や「課題解決力」、意図や結果を他者に伝える「プレゼンテーション力」について、十分に育てられていない実態がある。これらの力の育成には、日常の教科指導や総合的な学習の時間等において意図した課題の設定が必要である。このように、基礎的な学力を身に付けることだけでなく「未来を担う」ために必要な力を伸ばしていく必要性を抱えている実態である。



3 主な研究活動

(1) 第2学年の総合的な学習の時間における課題解決型の学習

今年度の研究は、第2学年の総合的な学習の時間を中心に進めた（*表1）。

はじめに、生徒ごとにばらつきのある keynote の習熟度を一定まで引き上げるために、「私の好きなもの」というテーマで各自が keynote を活用したスライド作成・班内プレゼンテーションを実施した。

次に、iPS 細胞に関する基礎的な知識を得るための取組として、「iPS 細胞のメリット」「iPS 細胞のデメリット」「iPS 細胞の作り方」「iPS 細胞の使い方」のように、調査するポイントをグループ内で分担して調べ学習を実施した。調査した内容をグループ内で交流することで、グループ全体の iPS 細胞に関する理解度を高めることを目指した。夏季休業中には、今後の課題解決の糸口として、「iPS 細胞と SDGs を関連付けて考えよう。」のテーマで、現代の社会課題の縮図である SDGs と iPS 細胞を関連付けて考える作業を組み込んだ。

2学期以降は本格的に課題解決型の学習を進めるにあたって、CiRA（京都大学 iPS 細胞研究所）から支援を受け、iPS に関する講演を聞いたり、個別学習を通して生まれた多くの質問にご回答いただいたり、更には生徒が考えた「解決法」に対して専門的な視点からアドバイスを受けたりした。

また、プロジェクトの進行は各グループに配置したプロジェクトリーダーを中心に行った。放課後にリーダー会議を4回実施し、自グループの課題解決を円滑に進めていくためのポイントを伝えたり、課題解決のプロセスについて、リーダー会を通じて経験させたりするなどの取組を行った。

それぞれが考えた解決法をさらに改善させ、学年から代表グループを選出し、「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」へ参加した。代表グループ決定後も、推敲を繰り返してより質の高いプレゼンテーション発表を行うことができた。

(2) 職員研修

夏期休業期間に京都府教育委員会中村一也指導主事にご協力いただき、職員研修を実施した。各教科における課題解決的な学習方法の例を模索することができた。

(表1)

時期	内容	詳細
6月	プレゼンテーション 「私の好きなもの」	keynote の基礎的な使い方を全生徒が理解することを目的に、各自が「私の好きなもの」をテーマに2分程度のプレゼンテーションをグループ内で行った。
7月	iPS 細胞についての知識をグループ内で分担して調査⇒ プレゼンテーションで交流	「iPS 細胞」という普段馴染みの薄い内容を学習するにあたり、グループ内で「iPS 細胞のメリット」「iPS 細胞のデメリット」「iPS 細胞の作り方」「iPS 細胞の使い方」という形で各自分担して調べ学習を実施した。各自が担当して調査した内容をグループ内でプレゼンテーションすることにより、グループ全員の iPS 細胞への理解をより深めることにつなげた。

夏休み	ワークシート「iPS 細胞とSDGs を関連付けて考えよう。」	夏季休業中の宿題として、個人課題として提示した。2学期に入って本格的に iPS 細胞の今後について検討していく準備段階として、現代の社会課題の縮図である SDGs と iPS 細胞の関連を探り、ワークシートにまとめた。
9 月	iPS 研究所講演会 「直撃！iPS 細胞！」	iPS 研究所の職員の方に来校していただき、各クラスで iPS 細胞に関する講演、質問会を実施した。
10 月 ～ 12 月	「誰もが安心して iPS 細胞を用いた治療を受けられるようになるためにどのようなことが必要でしょう」の問いでグループごとにスライドを作成	各グループで情報収集、スライドの作成を行い、クラス内プレゼンテーションを中間発表も含め、複数回実施して、修正・改善を図った。 各クラス代表を決定した後に、学年発表会を実施し、学年代表を決定した。



↑プロジェクトリーダー会の様子



↑クラス発表会の様子

4 今年度の研究の成果と検証

今年度の生徒アンケート(表2)において前向きな回答が多く得られた。特に「取組を通じて課題解決力が成長したと感じますか?」「取組を通じてコミュニケーション力が成長したと感じますか?」「取組を通じてプレゼンテーション力が成長したと感じますか?」の問いに対しては、主観的な回答であるとはいえ、すべての項目で80%以上の前向きな回答を得ることができた。今年度の取組を多くの生徒が「成長につながった」と捉えていることは、ひとつの成果といえる。

また、プロジェクトリーダー向けの質問である「プロジェクトリーダーの役割を通じて、様々な点で成長することができたと感じますか?」の問いについては36名中35名の生徒が前向きな回答をしていた。今回リーダーにはスケジュール管理、グループ内の役割分担、担任とのグループの窓口としての役割など様々なタスクを与えたが、結果として自身の成長につながったと感じたリーダーが多かった点も

大変有意義であったと振り返る。

そして、これら多くの前向きなアンケート結果は、生徒が取組に向かうための「動機付け」を意識的に、また多面的に行った結果ではないかと捉えている。今回の課題解決型の学習は与えたテーマが難しい分、学年全体として取組に向かう意欲をいかに継続させるかが肝心だと考えたからである。

動機付けの例としては、①「付けたい力」を事前に明示し、生徒に取組の目的意識を持たせたこと、②過去の優秀なプレゼンテーション発表を複数見せ、各々が目指す姿を具体的にしたこと、③プレゼンテーション発表を校内の大きな行事の中のひとつとして扱ったこと、④テーマの発表を、当事者(CiRA)の言葉で直接行っていただいたこと、⑤リーダーを重視し、リーダーへの積極的な立候補を促したこと、などである。

(表2)

質問項目 / 組	か？ な未 も未 前向 の担 の担 手手 につ いて ま と 組 む こ と が で き ま し た か ？	取 り ま え の こ と が で き ま し た か ？	か？ な未 も未 前向 の担 の担 手手 につ いて ま と 組 む こ と が で き ま し た か ？	か？ な未 も未 前向 の担 の担 手手 につ いて ま と 組 む こ と が で き ま し た か ？	策 を 見 出 し て い く こ と が で き ま し た か ？	い は 、 自 分 の こ と を こ の こ と と し て し な が ら 、 他 者 に 対 し て い く こ と が で き ま し た か ？	発 表 す る こ と が で き ま し た か ？	長 取 組 を 通 じ て こ の こ と を こ の こ と と し て し な が ら 、 他 者 に 対 し て い く こ と が で き ま し た か ？	題 目 を 選 び 、 こ の こ と を こ の こ と と し て し な が ら 、 他 者 に 対 し て い く こ と が で き ま し た か ？
回答数	215	213	214	215	215	215	215	215	36
そう思う	99	100	104	62	64	69	27	27	8
どちらかと言えばそう思う	96	97	93	121	111	111	8	8	11
どちらかと言えばそう思わない	17	14	15	31	35	33	1	1	1
そう思わない	3	2	2	1	5	2	0	0	0
そう思う	46.0%	46.9%	48.6%	28.8%	29.8%	32.1%	75.0%	75.0%	22.2%
どちらかと言えばそう思う	44.7%	45.5%	43.5%	56.3%	51.6%	51.6%	22.2%	22.2%	28.8%
どちらかと言えばそう思わない	7.9%	6.6%	7.0%	14.4%	16.3%	15.3%	2.8%	2.8%	2.8%
そう思わない	1.4%	0.9%	0.9%	0.5%	2.3%	0.9%	0.0%	0.0%	0.0%

5 今年度の課題

生徒が様々な視点を持って課題解決型の学習をすすめることができた今年度ではあるが、やはり意欲が低い子たちにとっては難しい手順だったように感じた。iPS 細胞というものをつかむことが難しいまま、取組がすすんでしまった生徒が一定数いたように感じる。また、生徒が課題解決にかかる時間は、より多くの時間を取るべきだと感じた。そして、生徒からの解決策について教師や研究協力者などからも検証を行う時間をより細かく設けることで、内容が深まった取組（発表）になったと考えられる。

6 事業終了後の研究構想

事業終了後は研究成果を活用し、総合的な学習の時間を軸として PBL の要素を取り入れた授業や探究活動を日頃から実践していくことを構想する。本校が目指す生徒像「深い学びを紡ぎだす生徒」の育成にはさらに「コミュニケーション力」「課題解決力」「コミュニケーション力」が大切である。事業を通じた生徒への成果、教員への成果、学校への成果を共有し、次に目指す力を明確にしなが、各教員が取組を通じて培った経験を活かして、各々が新たな学びを構想しながら、学校としても教員個人としても継続される研究へと発展させていきたい。